

自己評価報告書(最終報告)

報告者

幼年発達支援コース
／田村 隆宏

■平成24年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 科研費申請に向けた計画等

国立大学法人運営費交付金は年々削減され、教員の研究費配分も厳しくなっており、教員各自が研究のための外部資金を獲得しなければならない状況である。そこで、科研費申請に向けて、あなたが考えているテーマと計画等について示してほしい。

1. 目標・計画

最近、保育現場では新任保育者の精神的脆さが目立ち、少し辛いことがあるとすぐに辞めてしまう、との声がよく聞かれる。現在の保育においては単に子どもの保育だけでなく、保護者支援、小学校との連携、地域との関わりなど、保育者の役割が従来以上に拡がりつつある現状にある。このような現状から、保育者の資質として特に重要になってくるのが、少々辛いことがあって落ち込んだとしてもすぐに立ち直れる精神的回復力(レジリエンス)であり、保育学生が養成段階でこの力を身につけることが不可欠であるといえる。そのためには、精神的回復力(レジリエンス)の育成にはどのような要因が関わっているのかを明らかにする必要がある。そこで、精神的回復力(レジリエンス)と幼少期の親子関係との関係を明らかにし、特に人との関わりの中でどのような要因が精神的回復力(レジリエンス)を高めるのかを明示することから、保育者の養成段階に必要な具体的な活動内容や教育課程のあり方を示す、との計画で科研申請を考えている。

2. 点検・評価

年度目標で示したテーマについて、先行研究の検討、調査、分析、成果発表等を予定通り進めた。しかし中間報告でも述べたように、科研費申請にはさらに基盤となる研究成果を積み上げる必要があるとの判断に至り、今年度の申請は見合わせた。今年度得られた研究成果では、青年期の精神的回復力(レジリエンス)には、幼少期の親子関係において、特に母親との親密性や同一視欲求が大きく関わっていることが明らかになった。ただし、その母親との親密性や同一視欲求が精神的回復力に関わる心理的特性のどのような側面を育むのかという点が現段階では明確ではなく、科研で採択されるための研究目的の論理構成が現段階では困難な状況にあった。そこで、さらに詳細な検討の時間が必要になったことから、今年度の申請を見合わせた次第である。しかし、この事態は、現時点までに得られた研究成果の具体的な内容との関連で必然的に生じたものであり、予定していた研究活動をしかるべき時に実施せず遅れたことによって生じたものではない。そのため、本報告としては、予定通り進捗しているとする。

I-2. 大学院学生定員の充足に向けた取り組み

専攻・コースのこれまでの大学院学生定員の充足状況を踏まえた上で、あなたは定員充足のためにどのような取り組みを行うか、具体的に示してほしい。

1. 目標・計画

ここ数年の動向として、本コースは定員15名の内、2、3名が埋められない状況が続いている。達成目標は当然の如く、不足している定員を何としても確保することにある。その具体的な方策として、次のような方策を講じたいと考えている。

- ①看護系や福祉系関連の学部・学科を持った大学をコース独自に検索し、分担して訪問する。
- ②数年間、受験生を送ってもらっている大学には、在学中の院生の活動状況を報告するとともに、次年度の受験についても、卒業生に呼びかけてもらうように依頼する。
- ③徳島県下あるいは他県において本コースの教員が実施する講演の際に、本大学院及び本コースの紹介を行い、受験を勧める。
- ④免許更新講習を通して、広報活動を行い、本コースの受験を勧める。
- ⑤学会等を利用して、広報活動を行う。

2. 点検・評価

今年度は、コースの定員充足のために以下の活動を積極的に行った。

- ①看護系や福祉系関連の学部・学科を持った大学をコース独自に検索し、研究活動に関わる出張の機会等を利用して訪問した。
- ②数年間、受験生を送ってもらっている大学には、在学中の院生の活動状況を報告するとともに、次年度の受験についても、卒業生に呼びかけてもらうように依頼した。
- ③徳島県下あるいは他県において本コースの教員が実施する講演の際に、本大学院及び本コースの紹介を積極的に行い、受験を勧めた。
- ④免許更新講習を通して、広報活動を行い、本コースの受験を勧めた。
- ⑤学会等の機会を利用して、広報活動を行った。

II. 分野別

II-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

学部生、大学院生の就職活動については、コースが収集している採用試験に関する情報、及び過去の修了生、卒業生からの採用試験に関わる情報を学生に積極的に提供し、就職に対する意識や意欲を高める。また各地から送られてくる教員や保育士の募集情報を学生に積極的に提供し、学生の就職活動をサポートする。

2. 点検・評価

学部生、大学院生の就職活動については、コースが収集している採用試験に関する情報、及び過去の修了生、卒業生からの採用試験に関わる情報を学生に積極的に提供し、就職に対する意識や意欲を高めた。また各地から送られてくる教員や保育士の募集情報を学生に積極的に提供し、学生の就職活動をサポートした。その結果、本コースの長期履修の大学院生の半数の学生、学部4年生ではすべての学生が公立の幼稚園、保育所、小学校、特別支援学校の教員採用試験で正採用された。

II-2. 研究

1. 目標・計画

現在、調査途上にある、大学生を対象とした精神的回復力(レジリエンス)に及ぼす幼小期の親子関係の影響に関わる成果を関連学会で発表し、学術誌に論文投稿をする。さらに、附属幼稚園との共同研究のテーマである「幼児期における科学的思考の発達」にかかわる成果を紀要にまとめる。

2. 点検・評価

大学生を対象とした精神的回復力(レジリエンス)に及ぼす幼小期の親子関係の影響に関わる研究成果を9月に日本心理学会、11月に日本教育心理学会で報告した。研究成果の具体的内容は、青年期の精神的回復力(レジリエンス)には、幼少期の親子関係において、特に母親との親密性や同一視欲求が大きく関わっていることが明らかになった。これらの研究成果を現在、論文として執筆中で学術誌への投稿を予定している。

さらに、附属幼稚園との共同研究のテーマである「幼児期における科学的思考の発達」にかかわる成果については、現在共同の研究会を重ねてデータを収集しており、その研究成果については、附属幼稚園研究紀要にまとめ、2月に発行された。

これらに加えて、日本教育心理学会から執筆依頼された今年度「教育心理学年報」の発達部門(乳・幼児)の展望論文「乳幼児発達研究の動向とその成果の教育現場への貢献」が校正段階に入っており、近日中に発行される予定である。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

基礎臨床系教育部代表の評議委員として特に教育・研究面における大学運営に関わる。また、学部入試委員会委員として学部入学試験の業務に直接的に関わる。また東京学芸大学を主幹とした6大学連携人材GPIに関わる社団法人の運営委員として特にカリキュラム検討を担当し、教育支援人材育成事業に積極的に携わる。

2. 点検・評価

基礎・臨床系教育部代表の評議委員として特に教育・研究面における大学運営に関わった。また、学部入試委員会委員として学部入学試験の業務に直接的に関わった。また東京学芸大学を主幹とした6大学連携人材GPIに関わる社団法人の運営委員として特にカリキュラム検討を担当し、教育支援人材育成事業に積極的に携わった。さらに、本学の特別経費(プロジェクト分)「教員養成モデルカリキュラムの発展的研究」事業にかかわるカリキュラムマップ・ガイドライン研究協議会のメンバーとして、特にカリキュラムマップの開発に関わった。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

附属幼稚園との連携については、月に2~3回開催される合同研究会に参加し、保育実践に関わる共同研究に加わり、その成果を附属幼稚園研究紀要にまとめる。

社会との連携については、教育支援アドバイザーとして複数のテーマを掲げ、講演等の依頼に対して積極的に赴くことに加え、徳島市教育委員会・社会教育委員として地域の社会教育に貢献をする。さらに、鳴門市子育て支援事業における保育カウンセラーとして、保育者や保護者の相談に応じる。

2. 点検・評価

附属幼稚園との連携については、月に2~3回開催される合同研究会に参加し、保育実践に関わる共同研究に加わっている。昨年度から文科省から委託されている「幼稚園での科学的思考の育成」というプロジェクト研究を進めており、関連するデータを収集し、その成果を附属幼稚園研究紀要にまとめ、2月に発行された。

社会との連携については、教育支援アドバイザーとして6月に阿南市新野幼稚園で「幼児期のしつけについて」というテーマで講演を行った。徳島市教育委員会・社会教育委員として地域の社会教育に関わる問題を検討した。さらに、鳴門市子育て支援事業における保育カウンセラーとして、6月、7月と2月に保育者や保護者の相談に応じた。また、2月には徳島市子育て総合支援センター「みらい」からの依頼で、センターの事業である「子育て応援の匠」として、子育て支援ボランティアを対象に「発達障がいについて」と題した講演を行った。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

次期学長選考委員として、学長選考のあり方を検討した。任期は2年であり、来年度も、選考方法の検討、実施等に関わる予定である。